

【長崎】3人の息子は皆医師に、マンネリ化した診療所に新風を吹き込んでくれる-白髭豊・白髭内科医院院長に聞く◆Vol.3

第7回日本在宅医療連合学会大会を長崎で開催

m3.com地域版

2025年6月14～15日に出島メッセ長崎で第7回日本在宅医療連合学会大会が開催される。大会長の片翼を務める、白髭内科医院院長の白髭豊氏は30年にわたり長崎県の在宅医療を担い、長崎在宅Dr.ネットの設立や多職種連携などを通じて地域の医療・介護に貢献してきた。白髭内科医院は長崎で117年の歴史のある診療所であり、白髭豊氏は4代目に当たる。これまでのキャリア選択や医院承継を決めた理由、在宅医療における課題への取り組み、現在の診療状況とともに、第7回日本在宅医療連合学会大会にかける思いを聞いた。（2025年4月10日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第2回は[こちら](#)

3人の息子は皆医師に「私は子どもに恵まれている」

——現在の訪問診療の体制についてお聞かせください。

当院は常勤医が私1人で、非常勤医が4人です。このうち2人は外来担当で、残り2人は訪問診療をするために来てくださっています。現在担当している在宅患者は77人で、うち32人が施設入居者です。私が長崎在宅Dr.ネットで副主治医となっているのは90人ほどですが、実際に対応するのは年に1～2回あるかないかという程度です。

——非常勤医の先生とは、どのようにつながったのですか。

外来を担当している非常勤医は、長崎大学の第一内科などをお願いして派遣していただいています。金曜日の午前中は糖尿病外来として以前は有森春香先生に、2025年4月からは中村祐太先生をお願いしています。また、金曜日の午後は国立がんセンター時代の先輩であった呼吸器内科医の福田正明先生に来ていただいています。定年後にお誘いしたら快諾してくださいました。また、土曜日の午後は次男とその友人が訪問診療を行ってくれるようになったので、助かっています。

——お子さまも医師になったんですね。

私には子どもが4人いて、3人の息子は全員医師になっています。長男は長崎大学で感染症と救急医療を専門としており、次男も長崎大学で膠原病を専門にし、三男は東京で研修医になったばかりです。長女は、現在歯学部で歯科医になるための勉強中です。

——診療所を運営していく中で苦労されたことはありますか。

もう承継して30年になるのでマンネリ化していました。以前は機関誌を毎月作っていたのですが、面倒くさくなって10年以上前に止めました。高齢化して行き詰まりを感じ、面倒くさいな、早く辞めたいなと思っていた頃、コロナ禍になって2021年に次男が帰ってきてサポートしてくれました。ガレージ外来の会計をキャッシュレスにしたり、電話診療のためにホームページ上でクレジット決済できるようにしたり、トラブルの多かった電子カルテをエムスリーデジタルに変更したりしてくれました。

次男はフランスのINSEAD（欧州経営大学院）というビジネススクールで勉強してきた経験を生かし、「ちょっとした工夫で経営は変わる」と、当院スタッフへの助言や改革をしてくれました。そうしたら、ガラッと診療所の雰囲気が変わって活性化し、当院の経営は劇的に変わりました。ベテラン職員が辞めそうになっていたところを食い止めたのも彼のおかげだと思っていますし、彼が所属する医局とのパイプがあるので人材確保もしやすいと思います。こうやって話していると、改めて私は子どもからのサポートに恵まれていると思いますね。

——いずれ医院の承継もお考えなのでしょうか。

そうですね。長崎市全体としては人口が減っているのですが、当院のある地区は周辺にマンションが建ち続けていて、患者数が増えていますから、経営が行き詰まっているということはありません。あと10年くらいしたら完全に移譲するつもりでいます。ただ、長男も次男も能力が高いので、開業医にならず、大学組織で上を目指す道もあるのではないかと思っています。三男は東京にいますし、まだ研修医なので今後どうなるかは分かりません。



白髭豊氏。院内の中庭にて。

長崎市の自宅死率は7.3%から16.5%に上昇

——先生は30年間にわたり長崎の訪問診療に関わってこられました。時代の変遷を振り返って、思うことはありますか。

2005年のデータでは、長崎市の自宅死率は7.3%（全国平均は12.2%）しかありませんでした。そこから長崎在宅Dr.ネットや多職種での連携を進めていくことで、結果的に自宅死率が上昇してきて、家で看取ることに対する抵抗感がだいぶなくなってきた印象を受けています。また、かつては施設で看取ることが少なかったのですが、ここ十年ぐらいの間に一般的になってきました。おそらく高齢化という時代の要請に合わせて意識が変わってきたのでしょう。歓迎すべき変化だと思います。

一方で、長崎市の開業医数は2013年頃から減少傾向にあり、ピーク時の586人から510人まで減っています。かつて長崎市は人口10万人対の診療所の数は全国トップでしたが、大阪市に追い抜かされてしまいました。人口の減少よりも診療所の減少の方が急なので、地域によっては医療過疎になってきています。特に南部地区では2009年から2021年にかけて診療所が8軒減り、西部地区も6診療所あったのが2軒だけになってしまいました。

そのような医療過疎地域を埋めるために、地域の病院が周辺地区の訪問診療を開始しています。病院から訪問診療をしている先生も長崎在宅Dr.ネットの会員となっていて、拠点病院から退院して訪問診療を導入した件数は毎年のように増えてきています。結果的に長崎市の2023年の自宅死率は15.6%まで上がり、全国平均に迫る数値になってきました。

——病院には複数の医師が在籍しているので、長崎在宅Dr.ネットに入って周囲の先生方と主治医・副主治医を決めなくても、病院内でカバーできるのではないですか。

確かに病院内でチームを組んでいるところではありますが、病院であっても訪問診療を担当している先生が1人しかいない場合もあり、そのときは地域の開業医と主治医・副主治医で組んで対応しています。長崎在宅Dr.ネットはどちらの形でも対応できるようになっています。

第7回日本在宅医療連合学会大会を長崎で開催

——2025年6月14～15日に長崎メッセ長崎で開催される第7回日本在宅医療連合学会大会の大会長を安中正和先生（安中外科・脳神経外科医院）とともに務められます。見どころを教えてください。

ありがたいことに、今までで最高の527演題が集まりました。私は2カ月間にわたり明けても暮れても全ての抄録に目を通し、2月末に査読会議で最終判定をいただきました。3月半ばには、ランチョンセミナーの枠が全て埋まり、肩の荷が降りたところです。

今回のテーマは「在宅医療の未来を語ろう。～2025年問題に向き合い、2040年に備える～長崎から全国へ」としました。プログラムは全部で100ほど準備しており、来場者は4～5000人ほどになるのではないかと見込んでいます。

長崎県内の在宅医療の歩みをオーバービューするようなシンポジウムをいくつか組んでいます。それと同時に、日本全国の在宅医療を見据える基調講演を川越正平先生（あおぞら診療所 理事長・院長）をお願いしており、特別講演で新たな概念であるヘルスヒューマニティーズ（病いや障害をもつ人とケアする人双方のウェルビーイングの向上を目的として、医学・看護・介護・教育とアート・人文学を融合する新しい学際領域）について足立智孝先生（亀田医療大学）に解説していただきます。日本尊厳死協会と連携してACP（advanced care planning）について深く考える特別シンポジウムを用意しています。

また、宮崎で「かあさんの家」という看取りの家を作った市原美穂さん、退院支援の専門家である宇都宮宏子さん、「マギーズ東京」の秋山正子さんの3人が登壇して、この30年間以上の彼女らの活動について実体験を通して振り返りするようなセッションもあります。企画演題も多数あり、ナイトデイサービス向けのアルコール入りゼリーなどを味見できる体験ブースを作るなど、さまざまな工夫を凝らした面白い企画が数多くありますので、ぜひ学会場にお越しください。



第7回日本在宅医療連合学会大会のポスター

——最後に、長崎県や周辺の地域の医療従事者に向けてのメッセージをお願いいたします。

長崎県は地理的なハンディキャップがあり、地域医療に取り組みにくい土地柄ではありますが、気概はどこにも負けないつもりで今までやり続けてきました。以前は少なかった在宅医療もここまで増えてきていますし、これから先

もどんどん発展させていって、医療連携モデルの一つとして全国に発信できればいいなと思っています。力を合わせて皆さんで頑張りましょう！

◆白髭 豊 氏（しらひげ・ゆたか）氏

1988年に東京医科大学医学部を卒業。長崎大学第一内科へ入局後、国立がんセンター中央病院内科を経て、米国チューレーン大学へ留学。帰国後、1995年に白髭内科医院を承継。認定NPO法人 長崎在宅Dr.ネット副理事長、日本在宅医療連合学会理事、全国在宅療養支援医協会代議員、日本プライマリ・ケア連合学会代議員、日本尊厳死協会・ながさき会長。2025年6月14～15日に出島メッセ長崎で行われる第7回日本在宅医療連合学会大会の共同大会長を務める。

【取材・文・撮影＝伝わるメディカル 田中留奈】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

